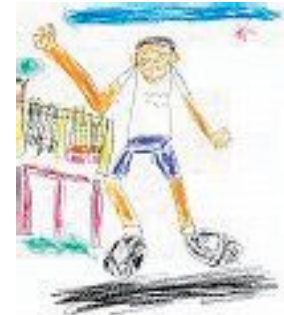
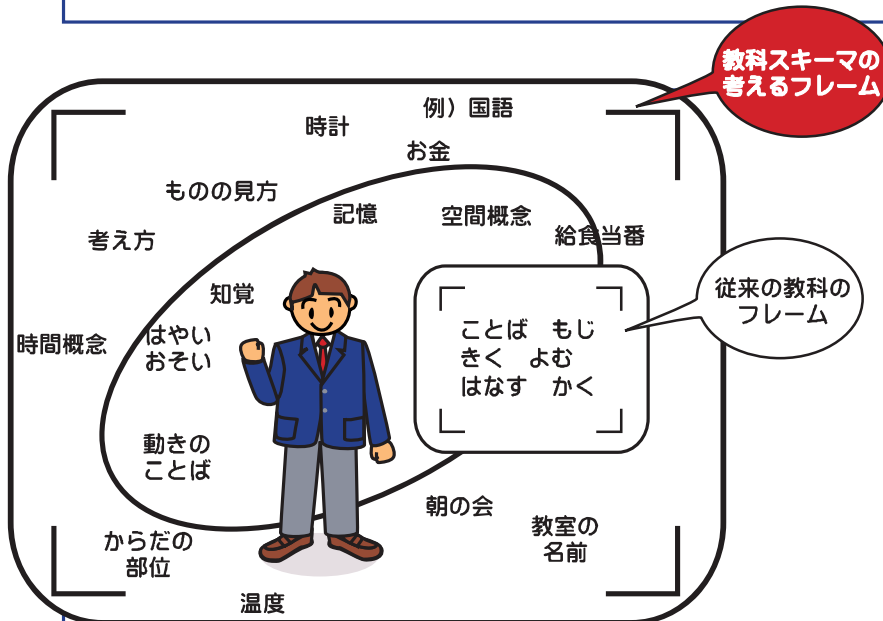


## 6 教科スキーマ

### 教科を拡張したフレーム



つまり、子ども一人ひとりの発達と自立をうながすために、各教科のもつねらいと内容の枠を機能的、有機的に広げ、子どもを中心としたネットワークにしたものと言えます。

#### ■教科スキーマとは

私たちが教科として思い浮かぶのは、国語ならば「ことば、文字」の学習でしょう。算数と聞けば、「たし算やかけ算」などでしょう。

教科書は、学年ごとの目標と学習内容が単元として並べられています。

たとえば、国語ならば「絵本などを楽しむ」や「簡単な語句や短い文などを正しく読む」が提示されています。

しかし、子どもの課題をとらえる視点は、教科の枠におさまるものだけではありません。

ことばや文字を生きたものとして学ぶために、国語でも買い物場面が有効であったり、理科でも量の比較を示す言葉の学習が大切であることがあります。

そこで、従来の教科の目標と学習内容を核としながら、さらに子どもの課題から考えられるねらいや題材を柔軟につなげて拡張することが有効であると考えました。

このような考え方による教科の枠組みを「教科スキーマ」としました。

#### ■教科は目的ではなく手段

たとえば、「絵本を読む」ためには、ものの名前や空間位置関係、人と人の関係や時間の概念などの理解が必要です。

教科スキーマでは、「絵本を読む単元だから、文字を声に出して読む」のような授業ではなく、文と行動を対応させたり、メンタルモデルを頭の中に組み立てられることを学習する「手段」として、絵本を学習活動として用意します。

子どもによっては、微細な運動の課題も必要な場合があるでしょう。

「教科・領域を合わせた指導」は教科が持っている内容をどう教えるか、という発想がもとにあります。

しかし「教科スキーマ」は、子どもの発達課題にどうアプローチすることが有効か、を考えます。

そのために、従来の教科の目標と内容を核としながら、扱う題材やねらいの枠を拡張して選択します。これを可能にするのが、教科スキーマという発想です。